

長崎学、その沿革と意義



長崎市立博物館

館長 原 田 博 二

1946年	長崎市に生まれる
1971年	中央大学大学院修士課程修了
同 年	長崎市立博物館に学芸員として勤務
1993年より	博物館長
現在、	市教育委員会生涯学習部理事兼博物館長のほか 県文化財保護審議会委員、長崎純心大学非常勤講師

長崎学とは

近年、例えば江戸学とか京都学、福岡学などのように、各地で何々学と呼ばれる学問が盛んになりつつあるが、勿論、わが長崎学は、全国のこの何々学の先駆け的存在で、またその中心的存在である。

長崎学は、その名前のとおり長崎のことを調査・研究する学問であるが、これは一郷土史でも、一地方史でも、一地域史でもなく、鎖国時代、長崎が幕府の開いた唯一の貿易港として光輝いた時代を中心に、歴史や文化は勿論、風俗習慣や衣食住に至るまで、幅広く長崎のことを知ろうというものなのである。

そこで、以下、この長崎学の沿革とその意義についてふれてみよう。

長崎の歴史

長崎の歴史は、元亀元年（1570）長崎開港に始まる。それまでの長崎はまったくの寒村に過ぎなかったが、このポルトガル貿易港として開港されたことにより、長崎は歴史の表舞台に立つことになった。

その後の天正8年（1580）長崎は、茂木とともにイエズス会の領地とされ、わが国におけるキリスト教の中心地となったが、同15年（1587）豊臣秀吉は、バテレン追放令を布告して、長崎・茂木をイエズス会より没収、以後、直轄領とした。江戸幕府も長崎を天領とし、長崎奉行が支配、寛文12年（1672）以降、町数は80、人口は約5万人を数え、西日本では大坂に次ぐ大都会であった。また、長崎はこの長崎奉行の支配の下、町年寄を頂点とする長崎の地役人達（町人達）によって自治が行われるという、全国でも極めて特異な都市でもあった。

長崎開港以来、継続されたポルトガル貿易は、寛永16年（1639）廃止されたが、同12年（1635）以降は中国貿易の、同18年（1641）以降は、オランダ商館の長崎出島移

転によって、中国貿易、さらにはオランダ貿易を独占、異国情緒あふれる街となった。また、ビードロやギヤマンに代表される貿易品は、長崎ものと呼ばれ、全国にもたらされた。

幕末の安政6年（1859）長崎は神奈川、函館とともに開港場に指定され、大浦に外国人居留地が造成されたが、この居留地は幕末の動乱期の一つの舞台となった。

明治維新とともに、長崎には町会所が置かれ、第1大区となったが、明治11年に長崎区となり、さらに同22年に市制が施行され長崎市となった。また、同10年以降、上長崎村と下長崎村が部分的に長崎市に編入されたが、同31年には上長崎村、下長崎村、浦上淵村のほぼ全域と浦上山里村、小櫛村の各一部が長崎市に編入された。さらに、その後も市域は拡大され、昭和13年（1938）から同48年（1973）にかけて西浦上村、小ヶ倉村、土井ノ首村、小櫛村、福田村、深堀村、日見村、茂木村、式見村、東長崎村、三重村が合併された。長崎市の人口は、大正9年（1920）の第1回の国勢調査では17万6,534人（世帯数は3万7,039世帯）で、九州第1位（全国第7位）であった。以後も、市域は拡大されたが、昭和20年8月9日の原爆投下により壊滅的な被害に見舞われた。

しかし、戦後の復興は目覚ましく、造船や水産、観光などを基盤とした産業都市として注目を集めた。

現在の長崎市の人口は42万3,167人（平成12年の国勢調査）、この造船や水産にはやや陰りのあるものの、観光を中心に、豊富な歴史遺産を背景とした新たなまちづくりに取り組んでいる。

長崎関係地誌類

このように、特異な発展を遂げた街であるだけに、江戸時代から「長崎略記」をはじめ、多くの地誌類が編纂されたり、著述されたりしたが、これら地誌類は、現在においても、長崎学、特に江戸時代の長崎を知る上での貴重な史料となっている。

なかでも、「崎陽群談」は、長崎奉行大岡備前守清相（1711～17在任）が正徳新例発布前後の行政資料を後任の長崎奉行に引き継ぐために、自身の意見を付して編纂したもので、貿易から財政、さら



「長崎志正編」（長崎市立博物館蔵）

には、天領長崎に対する諸政策など豊富な内容が記述されている。また、「長崎志正編」は、「長崎実録大成」とも呼ばれる。長崎聖堂書記役田辺茂啓が編纂、明和元年（1764）長崎奉行所に献上したが、長崎奉行より以後の書継ぎの命があったので、同4年（1767）まで継続された。同5年（1768）茂啓が死去すると、以後の書継ぎは、書物改手伝小原克紹が行うことになったが、克紹は、茂啓のそれを「長崎志正編」と改め、以後のものを「長崎志続編」とした。続編は、克紹の死後も野間寿恒等によって引継がれ、天保

10年（1839）まで編纂が継続されたが、この正編・続編は長崎奉行所の編纂ともいうべきもので、まさに長崎の正史でもあった。

さらに、幕末になると、旅行ブームが長崎にも到来、大和屋によって長崎板画「長崎八景」が刊行された他、各種の図絵等も編纂された。なかでも「長崎名勝図絵」は、長崎聖堂助教饒田諭義が長崎奉行筒井和泉守政憲の命により編述したもので、挿絵は画家打橋竹雲が担当した。以後、刊行に至らなかったが、昭和6年

図表 長崎関係地誌類

名 称	著者・編者	成 立 年
長崎略記	不詳	不詳
長崎土産	不詳	延宝9年（1681）
長崎拾介	不詳	元禄2年（1689）
寛宝日記	不詳	不詳
長崎根元記	不詳	不詳
長崎縁起略	不詳	不詳
長崎記	不詳	不詳
長崎虫眼鏡	菅秋著	元禄16年（1703）
長崎夜話草	西川忠英著	享保5年（1720）
長崎鑑	橘景隆著	正徳元年（1711）
長崎図志	長崎君舒著	正徳5年（1715）
崎陽群談	大岡清相編	正徳年間（1711～16）
長崎志正編	田辺茂啓編	明和4年（1767）
長崎志続編	小原克紹他編	天保10年（1839）
長崎雑誌	勝木沈山著	不詳
長崎紀聞	田沢春房著	文化4年（1807）頃
長崎古今集覧	松浦東溪編	文化8年（1811）
長崎先民伝	盧千里著	享保16年（1731）
長崎港草	熊野正紹著	寛政4年（1792）
長崎聞見録	広川獬著	寛政12年（1800）
華蛮交易明細記	不詳	享和年間（1801～04）
長崎歳時記	野口文龍著	寛政9年（1797）
長崎名勝図絵	饒田諭義著述 文・野口文龍 挿絵・打橋竹雲	文政年間（1818～30）
長崎古今集覧名勝図絵	挿絵・石崎融思	天保年間（1830～44）
長崎土産	磯野文斎著（挿絵）	弘化4年（1847）
長崎不二賛	高宮栄斎著	嘉永4年（1851）
長崎万歳	高宮栄斎著	嘉永5年（1852）
金井八郎備考録（諸元極）	金井八郎編	安政2年（1855）



「長崎八景」（長崎市立博物館蔵）

に長崎史談会によって刊行され、やっと日の目をみるに至った。また、「長崎古今集覧」は、松浦東溪が文化8年（1811）に著述したもので、挿絵も打橋竹雲や石崎融思等がその制作を行ったが、ついに完成に至らず、石崎融思の筆になる「長崎古今集覧名勝図絵」が長崎市立博物館に残されている。

以上のように、これら地誌類を編纂したり、著述した田辺茂啓（1688～1768）や長崎君舒（？～1746）、松浦東溪（1752～1820）、熊野正紹（？～1797）、饒田喩義（1772～1833）等は、長崎聖堂の書記役や唐人番を勤めたりする地役人であったが、歴史学者でもあったのである。

幕末・明治以降の歴史学者

幕末から明治になると、西道仙（1836～1913）、香月薫平（1828～95）、荒木周道（1840～1910）、金井俊行（1850～97）等が活躍した。

なかでも、西道仙は、本業は医者で、政治家でもあったが、賜琴石斎などと号した漢学者でもあった。現在の県立長崎図書館の前身でもある長崎文庫の創設に参画したが、かたわら長崎古文書出版会を結成、「長崎叢書」を刊行するとともに、「長崎水道論」、「徳川時代勤儉貯蓄法令集」、「古今学芸書画博覧」などを著述、刊行した。金井俊行も、政治家で、長崎区長や南高来郡長などを勤めたが、かたわら史料の散逸を憂い、積極的にその収集を行い、「長崎年表」、「増補長崎略史」、「長崎水道一斑」、「原城耶蘇乱記」などの著述、刊行した。

また、長崎市を中心に各種の編纂事業が行われ、「長崎夜話草」・「原城紀事・耶蘇会年報」・「増補長崎略史」（上・下）が「長崎叢書」として長崎市役所から刊行されたのをはじめ、「幕府時代の長崎」（長崎市役所刊）、「長崎県人物伝」（長崎県教育会刊）、「明治維新以後の長崎」（長崎市小学校職員会刊）、「長崎県郷土誌」（長崎県史談会刊）などが相次いで刊行されたが、これらの集大成とも称するものが、大正12年から昭和13年にかけて長崎市が刊行した「長崎市史」であった。この「長崎市史」は、地誌編（4冊）、西洋貿易編（1冊）、東洋貿易編（1冊）、名勝旧跡編（1冊）、風俗編（1冊）の全8冊であったが、顧問には三上参次・新村出、編集参与には永山



「長崎市史」（長崎市立博物館蔵）

時英、編集委員には村上直次郎・矢野仁一・川島元次郎・古賀十二郎・福田忠昭といった当時錚々たる陣容で、それまではさほどでもなかった対外交渉史の部分が大幅に充実されたものとなった。さらに、昭和38年からは「長崎県史」が長崎県より通史編（4冊）、史料編（4冊）として刊行されたが、通史編は、古代・中世編、藩政編、近代編、対外交渉史編の4冊で、これまでの長崎学を集大成するものとなっている。

ところで、上記の「長崎市史」であるが、当初は、美術編、工芸編、学芸編、政治編、人物編、警備編、外交編、年表、通史、地図なども計画されていたということであるから、その実現に至らなかったことが、大変悔やまれるのである。

このように、明治以降、特に「長崎市史」の刊行を切っ掛けに、外国の文献がさかんに導入されるようになったが、その中心が古賀十二郎(1879～1954)、武藤長蔵(1881～1942)、渡辺庫輔(1901～63)の各氏であった。

なかでも、古賀十二郎氏は、長崎五島町のかつて黒田家の御用達を勤めた古賀家に生まれたが、長崎市立商業学校から東京外国語専門学校（現・東京外国語大学）に進み、卒業後は、その豊かな語学力を武器に長崎の歴史の研究を行い、今日の長崎学の基礎を樹立した。「長崎市史・風俗編」、「西洋医術伝来史」、「長崎洋学史」、「丸山遊女と唐紅毛人」、「長崎画史彙伝」、「外来語集覧」などの著書があるが、その蔵書の一部は県立長崎図書館の古賀文庫に収められている。

この古賀氏と双璧と称されたのが武藤長蔵氏であった。武藤氏は、愛知県に生まれたが、東京高等商業学校（現・一橋大学）を卒業後は長崎高等商業学校（現・長崎大学経済学部）の教授を勤めたので、野の古賀に対して、官の武藤とも称された。「日英交通史之研究」や「海外文化と長崎（遺稿）」などの著書があり、その豊富な蔵書は、現在、長崎大学付属図書館経済学部分館の武藤文庫に収められている。

また、古賀十二郎氏の後を継承したと称されるのが渡辺庫輔氏であった。渡辺氏は、長崎市五島町に生まれたが、大正8年長崎に来遊した芥川龍之介と知合い、以後、小説の指導を受けている。他にも俳句は高浜虚子に、短歌は斉藤茂吉にそれぞれ指導を受けたといい、ペン・ネーム与茂平は、斉藤茂吉の名付けたものという。一時は、東京で活躍したが、帰郷後は郷土史家として、古賀氏とともに長崎学の発展に寄与した。「崎陽論攷」、「長崎の鋳物師」などの著書その他、「史料摘録」、「投化唐人墓碑録」、「訳司彙伝」、「皓台寺他過去帳」など膨大な調査ノートがあるが、それらは、県立長崎図書館の渡辺文庫に収められている。

それから、自身は郷土史家ではないが、長崎学を関東や関西に盛んに紹介したのが、

永見徳太郎氏（1890～1950）であった。永見氏は、長崎市銅座町に生まれたが、永見家は、当時、長崎を代表する素封家であった。永見氏も、家業の倉庫業のかたわら市会議員やブラジルの名誉領事などを勤めたが、事業に失敗後は、東京に移住、著作に従事している。長崎での全盛時代、多くの文化人と交際したが、長崎市立博物館に所蔵されている尺牘集には、芥川龍之介や谷崎潤一郎、竹久夢二、菊池寛、永井荷風、横山大観、前田青邨などの書簡が、実に320通も収められている。また、永見氏の提供した情報をもとに誕生したのが、芥川龍之介の「奉教人の死」であり、長与善郎の「青銅のキリスト」であった。

戦後、そして現代の長崎学

戦後の長崎学をリードしたのが長崎史談会（昭和3年設立）と長崎学会の2つの研究会であった。

この長崎史談会を主宰したのが、長崎市立博物館の学芸員でもあった林源吉氏（1883～1968）であった。かたわら長崎学会は、渡辺庫輔氏が設立、主宰したが、この渡辺氏の薫陶を受けたのが、永島正一（1912～87）、宮田安（1911～94）、越中哲也、中西啓（1923～2002）の各氏であった。永島氏は県立図書館長を勤め、長崎放送でものしり手帳を昭和28年から亡くなられる直前まで続けられた。宮田安は、黄檗や唐通事の研究で知られ、「崇福寺論攷」や「唐通事家系論攷」などを著されたが、中西啓氏も、本業の医師のかたわら医学史の研究で知られ、「長崎医学百年史」や「長崎のオランダ医たち」、「シーボルト評伝」などを著された。

また、従来、未開の分野であった長崎のキリシタン史の研究に貢献したのが片岡弥吉氏（1908～80）であった。片岡氏は、長崎市に生まれ、昭和13年から42年間純心女子学園で教鞭をとられ、同44年からは純心女子短期大学の副学長を勤められた。「高山右近大夫長房伝」「長崎の殉教者」、「日本キリシタン殉教史」などの著書があり、その蔵書は純心大学のキリシタン文庫に収められている。

一方、越中哲也氏（長崎純心大学教授）は、長崎市立博物館学芸員、さらには館長に就任されてからも、長崎史談会を主宰されたが、さらに長崎歴史文化協会を主宰されるなど、現在でも幅広く長崎学の普及活動に当たっておられる。主な著書に「越中哲也のひとり歩き」、「写真集・明治大正昭和長崎」、「長崎の美術・工芸」などがある。

以上、江戸時代以降の地誌類の編纂や各種の刊行事業や歴史家について概観したが、既に述べたように長崎学は、単なる郷土史でも地方史でも、地域史でもないことは言

うまでもない。長崎は、鎖国時代においても、幕府が開いた唯一の貿易港として、全国が、また、世界が注目する町であった。だから、長崎学の長崎学たる所以は、日本の近世史の高いレベルにあるとともに、海外との密接な関わり合いにもあるわけである。

今日、長崎市内においても、例えば長崎県の県民大学講座をはじめ、長崎市立博物館の公開講座や史跡めぐり、長崎市の長崎伝習所の塾活動など、各種の長崎学の取り組みが行われ、多くの方々が参加をされている。

特に長崎市立博物館の公開講座や史跡めぐりは、本年は市町村合併を踏まえ、江戸時代の天領長崎と各藩の村々をテーマに行っているが、毎回、200人以上の人達が参加されている。さらに、公開講座や史跡めぐりの成果をもとに、長崎学ハンドブックを、「長崎の史跡」（北部編）、同（南部編）などとして刊行、長崎学の普及活動に努めている。



長崎学史跡めぐり（大徳寺跡）

また、長崎市の長崎伝習所は、「ひとづくり」、「夢づくり」、「まちづくり」をテーマに、長崎の発展につなげようとするもので、本年は、出島事始め塾、長崎刺繍再発見塾、長崎陶芸復興塾、長崎ビジネス活性化塾など、全部で14塾があり、活発な活動が行われているが、特に長崎刺繍再発見塾や長崎陶芸復興塾などは、長崎刺繍や現川焼など、江戸時代に培われたこれら技術の修得や伝承等も大きな目的としているのである。

以上のように、長崎学は、このように単なる長崎の歴史や文化の調査・研究に止まらず、いろいろな方面での伝統技術の修得や伝承、さらにそれらを長崎のまちづくりにも反映させるという使命をも併せ持っているのである。そのようななか、来年秋に開館が予定されている「（仮称）長崎歴史文化博物館」は、県内博物館の中核博物館としての機能、さらにはこれら長崎学の一大拠点としての機能も盛り込まれているので、今後益々長崎学の発展が期待されるのである。